

SEED (シード)

Vol.010
2023.3月

2月18日に、令和4年度「駒大生社会連携プロジェクト」の活動報告会を開催しました。今号ではその模様と、4つのプロジェクトからの活動レポートをお届けします。

令和4年度 駒大生社会連携プロジェクト 活動報告会

日時 2023年2月18日(土) 13:00~15:00
開催方法 Zoomウェビナーによる配信

次第： 1. はじめに

開会挨拶：各務 洋子 ~駒澤大学 学長~

本制度の概要説明：松信 ひろみ ~駒澤大学 学術研究推進部長~

2. 事例報告 採択プロジェクト7団体

3. 講評 今年度外部審査員4名

4. おわりに

閉会挨拶：吉田 尚史 ~駒澤大学 副学長(教育・研究担当)~

事例報告 (世田谷区部門)

動画制作を通じた「せたがやの居場所」発信プロジェクト

経済学部 現代応用経済学科
松本 典子先生

事例報告 (世田谷区部門)


PBL型授業のモデル構築 - 世田谷発の起業家教育 -

経済学部 現代応用経済学科
長山 宗広先生

事例報告（世田谷区部門）

地域プロジェクトで市民育ち
—用賀と深沢における参加型調査研究—

文学部 社会学科 社会学専攻
李 妍焱先生



2022年度駒大生社会連携PJ

地域プロジェクトで市民育ち

用賀と深沢における参加型調査研究

駒澤大学文学部社会学科 李ゼミ

なぜ私たちがここにいるのか

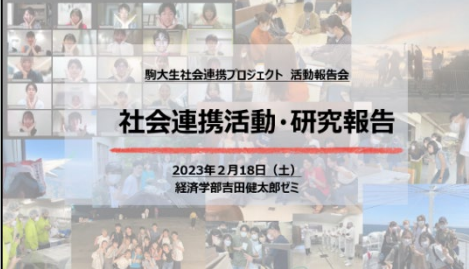
問題意識
・2年生のゼミで読んだたかさんの本からの学び
⇒マクロ：持続可能、脱成長の思潮に燃れる。成長志向ではない世界とはどんな姿？実践可能か？
⇒ミクロ：地域、ローカルがその実践の舞台。市民による取り組み、イニシアティブが大事とされる。
⇒ミクロ：市民とは誰のことか？どうやって市民を増やせる？

問い
・市民はどの程度可能か？
⇒特に、市民主導の地域のプロジェクトで、若者の市民性をどう育むことができるのだろうか？

事例報告（産官学連携部門）

産学連携による新商品開発と
新たな販路開拓の実践プロジェクト
～地場産業の新商品開発と
中小企業の海外販路開拓の事例～

経済学部 現代応用経済学科
吉田 健太郎先生



駒大生社会連携プロジェクト 活動報告会

社会連携活動・研究報告

2023年2月18日(土)
経済学部吉田健太郎ゼミ

【産学連携による新商品開発と新たな販路開拓の実践プロジェクト】 ～地場産業の新商品開発と中小企業の海外販路開拓の事例～

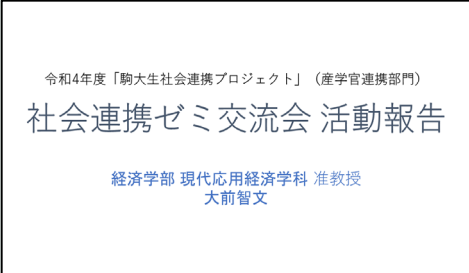
○産学連携における有効性の検証

- ①京都老舗和菓子屋のマレーシア進出のための新商品開発とコミュニケーションチャネルの構築（専門チームの立ち上げ）
- ②静岡のお茶農家の体験型観光である「茶摘み体験」を本業の「お茶(茶葉)」販売につなげるための新商品開発と販売方法の構築
- ③フィリピンでオフショアアウトソーシングに取り組み 日系中小企業の外国人材の日本市場開拓とトータルサービスの開発

事例報告（産官学連携部門）

社会連携ゼミ交流会

経済学部 現代応用経済学科
大前 智文先生



令和4年度「駒大生社会連携プロジェクト」（産官学連携部門）

社会連携ゼミ交流会 活動報告

経済学部 現代応用経済学科 准教授 大前智文

社会連携ゼミ交流会 プロジェクトの概要

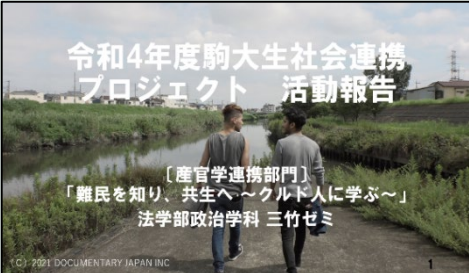
「社会連携ゼミ交流会」とは、社会連携活動をゼミ活動に取り入れるなど関心・実績がある学内ゼミを一堂に会し、参加者間の情報交換や連携・交流活動を活性化させることを目的として、2021年度より開催している企画である。

第二回目となる本年度は、2022年12月17日の土曜日午後（14：00から16：30）に開催した。経済学部、経営学部から7ゼミが参加し、学生による社会連携活動の報告と交流・情報交換ワークショップを行った。

事例報告（産官学連携部門）

難民を知り、共生へ
～クルド人に学ぶ～

法学部 政治学科
三竹 直哉先生



令和4年度駒大生社会連携プロジェクト 活動報告

「難民を知り、共生へ～クルド人に学ぶ～」
法学部政治学科 三竹ゼミ

② 上映会の概要-1

- ・実施日時：2022年12月17日（土）
- ・第1部：映画「東京クルド」の学内上映会
- ・第2部：日向史有監督トークセッション

・スケジュール

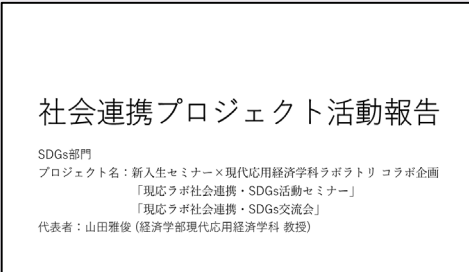
9:00	開場
9:45～11:35	上映
11:45～12:45	日向監督講演

事例報告（SDGs部門）

新入生セミナー×現代応用経済学科ラボラトリ
コラボ企画

「現応ラボ 社会連携・SDGs活動セミナー」・
「現応ラボ 社会連携・SDGs交流会」

経済学部 現代応用経済学科
山田 雅俊先生



社会連携プロジェクト活動報告

SDGs部門
プロジェクト名：新入生セミナー×現代応用経済学科ラボラトリ コラボ企画
「現応ラボ社会連携・SDGs活動セミナー」
「現応ラボ社会連携・SDGs交流会」
代表者：山田雅俊（経済学部現代応用経済学科 教授）

1-1. 本プロジェクトの目的

- ・社会連携そのものの理解とSDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）というテーマを通じて「大学」、「学生」、「企業・団体」間の連携・交流の萌芽となるような機会を提供すること

発表者の皆さま、ご視聴いただいた皆さま、ありがとうございました。

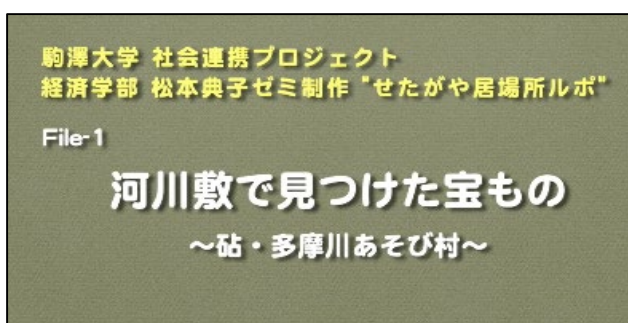
〔世田谷区部門〕

動画制作を通じた「せたがやの居場所」発信プロジェクト（経済学部：松本典子先生）

1月中旬に、各グループの撮影ロケが終わり、2月末には、NHKサービスセンターの星野さんにご協力いただいて、動画の編集を終えました。そこから、ナレーション収録などを行い、無事に動画を完成することができました。改めて、このプロジェクトにご協力いただいた取材先の方々や私たちのサポートをしてくださった星野さん、関わっていただいたすべての方に、感謝申し上げます。

この活動を通して、動画を撮る際の技術を学ぶだけでなく、企画力や表現力、取材先とのやり取りなど、多くの場面で対応するための力を身につけることができました。また、『せたがやの居場所』というものを、一般の方にどのように伝えればよいか、発信者としてゼミ生ひとりひとりが意見を出し合い、良いものを作ろうという思いのもと進めてきました。その思いが、私たちの動画を見てくれる方々の心に響いていただけたら、大変嬉しく思います。

※動画は各団体さんとの試写会と振り返りを終え次第、ステラnetで発信いたします。



〔世田谷区部門〕

地域プロジェクトによる市民育ち—用賀と深沢における参加型調査研究（文学部：李妍焱先生）

私たちは、「用賀サマーフェスティバル(YSF)」と「ふかさわの台所」の2つのフィールドで実践的な活動を行いつつ、主体的に市民活動に取り組んだ経験のあるの方々に対してインタビューも行いながら、研究を進めてきました。

「YSF」では、人の繋がり的重要性について改めて気付かされ、活動をする環境そのものが参加の意識やモチベーションに対して影響を及ぼす重要な要素であると学びました。「ふかさわの台所」では、「おかしのみちづくり」や「大人の語りBAR」といったイベントを主催することで、想いを引き出す食事の場の重要性や地域プロジェクトに取り組む方々の活動意識について学び、様々な経験をしてきた方々の生の声を聞いたことはとても良い刺激となりました。また、インタビューで得た情報をもとに理論と実践の両面から追究することで、より効果的に学びを深めることができました。

1年間の活動を通して、ここでしか経験できない貴重な体験、そして学びを得ることができました。ありがとうございました。



〔産官学連携部門〕

社会連携ゼミ交流会（経済学部：大前智文先生）

2022年度の社会連携ゼミ交流会は盛況のうちに終わることができました。

社会連携ゼミ交流会の運営に携わり、報告参加もした経済学部大前ゼミでは、2023年2月17日に連携先の安城建築株式会社様への最終報告会を実施しました。連携先の経営環境や経営課題に対する分析・考察に加え、学生ならではのフレッシュな視点に基づく具体的な改善策やイベントの提案をすることができました。安城建築代表の浅井宏充様からは「新たな気づきと元気を貰うことができた。業種業界のあり方は大きく変化しているが、この変化に柔軟に対応しなければならないことを強く意識することができた」というお言葉を頂戴し、本年度のゼミ活動の集大成とすることができました。

写真は社会連携ゼミ交流会での大前ゼミブース、オンラインによる最終報告会の様子です。



〔産官学連携部門〕

難民を知り、共生へ ～クルド人に学ぶ～（法学部：三竹直哉先生）

2月18日に私たちの集大成を披露する報告会が行われました。昨年の春から始動した私たちのプロジェクトは計画通りに進まないこともあり、そのたびに計画を練り直して苦勞することもたくさんありました。しかし、ゼミ生一同尽力し協力した結果、想定以上の参加者の方が来場され、9割以上の方に満足していただきました。この結果を見ると、私たちの「難民を周知する」というミッションは達成されたと思います。報告会では3年生の2人が発表者として私たちの成果を発表してくれました。報告会までに報告書を作成したりプレゼンの資料作りに、スライドづくりとプロジェクトを終えても多忙ではありましたが、報告会に向けた準備の時間含めて私たちの成果を存分に披露出来たと思います。

ゼミ生一同この経験を踏まえて4年生は卒業して新天地で、3年生は最後の学生生活に活かしていきます。

令和5（2023）年度「駒大生社会連携プロジェクト」の募集について

令和5（2023）年度「駒大生社会連携プロジェクト」の募集について、応募資格を有する教職員向けに学内グループウェアにてご案内しております。

申請資格は今年度と同様に、
「本学専任教職員1名以上を代表とした本学学生のプロジェクトチーム」です。
申請を予定している教職員の皆さまは、当該お知らせをご覧ください。

申込期間： **令和5年4月1日（土）～4月19日（水）18時まで**

※「活動計画書（様式1-1）」・「収支予算書（様式1-2）」を、社会連携センターまでお送りください。

令和4年度「駒大生社会連携プロジェクト」総評

駒澤大学 副学長（教育・研究担当） 吉田 尚史

本年度、「駒大生社会連携プロジェクト」として採択された7つのプロジェクトの皆様におかれましては、その活動をご報告いただきありがとうございました。

世田谷区部門で採択された3つのプロジェクトについて、世田谷区は本学がキャンパスを有する地域ということもあり、本学学生による世田谷区の課題発見と、その解決のための提案は非常に意義のあるものです。

松本先生のプロジェクトでは、世田谷の地域の方に向けて「居場所」の提供の運営されている団体の紹介ということで、各団体への丁寧な取材と、それをどのように多くの人に伝えるか、というところに力点が置かれ、NHKの動画制作に携わってこられたプロの方の知見を取り入れ、形にしていくプロセスが非常に新鮮でした。完成した動画は後日、公開されるとのことのでぜひ多くの皆様もご覧いただきたいと思います。

長山先生のプロジェクトは、経済学部で開講された正課授業を受講した学生が、その後に、課題解決に向けて自発的に行動する、という点が斬新であり、世田谷区にある企業とともに、イベントや企画を見事に実現させ、素晴らしい取り組みでした。座学から行動までを一連の流れとした、まさに本学におけるPBL教育を体現させたプロジェクトでした。

李先生のプロジェクトでは、実際に世田谷区で活動されている地域プロジェクトに、学生が飛び込み、その運営に携わることで、地域の課題を体感し、そして解決方法を地域の方と協働して取り組むというものでした。地域の課題を当事者として見つめ、アンケート調査といった社会学の手法を取り入れながら、行動につなげていくという活動の様子が報告されました。

産官学連携部門で採択された3つのプロジェクトは、企業等との密接な連携をとおして「社会課題」にどのように向き合うか、という大きなテーマのなかで、いずれも学部等の特色が現れたプロジェクトでした。

吉田先生のプロジェクトは、商品開発と販路開拓を軸に、「地域活性」「中小企業の課題解決」という骨太のプロジェクトで、その舞台も京都、静岡、マレーシア、フィリピンと、多様な連携先との協働が報告されました。プロジェクトメンバーの学生にとっては、実際に企業とともに活動することで、大学の教室だけでは得ることができない、実践的な学びの場となったことと思います。

大前先生のプロジェクトでは、本学の「社会連携」を行うゼミが一堂に集まり、その成果と情報を互いに共有する場を創出する、というプロジェクトでした。本学では、これまでも社会と連携し活動するゼミが多数ありましたが、ゼミ単体での活動に終始し、他のゼミの活動に対して目を向ける機会がなかった、というところに着眼され、このイベントが企画されました。学生間で事例や経験を共有することは、今後の本学の社会連携活動の促進に大きく寄与するものと思います。

三竹先生のプロジェクトは、「難民問題」について、関連する映画の上映会を通して、多くの人に考えるきっかけを作るというプロジェクトでした。ただ映画を上映するだけでなく、そこからどういったことを考えてほしいか、ということを中心に、プロジェクトメンバーの学生が一丸となって取り組む様子が報告されました。上映会後のアンケートでは、参加者の皆さんがこの問題を自分事として捉えることができたという声も寄せられたとのことで、インパクトを与えたプロジェクトとなりました。

SDGs部門で採択された山田先生のプロジェクトは、経済学部現代応用経済学科の新入生に向けて、「SDGs」に関する企業等の取組み事例に触れる機会を設けるというプロジェクトでした。1年生の前期の段階でこのような機会を設けることで、SDGsについての関心を深めさせるとともに、卒業後の進路についても具体的なイメージを持たせることができ、そして、あらためて大学で学ぶことの意義を再認識させる気づきの場となったと思います。

本年度の採択プロジェクトはいずれも大きな成果を果たし、「駒大生社会連携プロジェクト」初年度にふさわしい大変すばらしいものでした。ここまで、7つのプロジェクトを教え、導いてこられた主担当の先生方、そして各プロジェクトのメンバーの学生の皆さんに敬意を表します。

本年度6月に採択しました7つのプロジェクトの種が、このように、それぞれ大きな成果として、花を咲かせることができました。各プロジェクトの連携先としてご協力いただきましたすべての皆様に厚く御礼を申し上げます。ご協力、誠にありがとうございました。

駒澤大学では、来年度も「駒大生社会連携プロジェクト」を募集いたします。今後とも駒大生の社会連携活動にご協力を賜りますようお願い申し上げます。